

The Gallery voice

NO-39

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2009.9.12
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

Cut

照屋 勇賢

沖縄へ向かう飛行機に差し込んでくる空の青は、光の生命がみなぎっています。父方の祖母が亡くなった病室にもその光は遠慮なく病室を命いっぱいにくれました。夜空の浮き雲の造形のダイナミズムは上へ上へと呼吸を誘導してくれ、ミーバル百名ビーチのそのそっぽを向いた波の音も。帰郷するたび古里のこの土地には力を感じます。

雲や光、熱と大地に力を感じる沖縄。その力は人にもちゃんと伝わっているはず。でもなかなか自信を持つ事がむずかしい、僕は常に漠然としたコンプレックスにひきもどされ、はがゆさを感じていました。

どこから自信を持つ事ができるのだろうか？その自信の基盤自体をどうやって築くのか。自分自身の課題を今回の「Install」展に重ねるように、このプロジェクトに関わり始めました。「Install」展をきっかけに、沖縄400年の歴史を振りかえり、沖縄を盛り上げた人達を、紅型で染めてみたいと思いつきました。沖縄の歴史は誰が盛り上げたのでしょうか。チムドンドンさせた人達や出来事はたしかに存在します。僕は、紅型の型の存在と、色彩が染まった時の潔さ、輝きに同じような、胸の高鳴りを感じます。沖縄の歴史の軸に、輝く印を置いていくように。型染めで、かれらの力強さを強調できたら、そして時代に流されて行く一瞬一瞬の力強さをもういちど集めてみようという試みです。そして私達の自信を私たちの歴史からしっかりと認め、知って、進みたいです。そのための最初の試みとなります。

沖縄へ向かう飛行機に入り込んでくる空の青は、光の生命感がみなぎっています。父方の祖母が亡くなった病室にもその光は遠慮なく病室を命いっぱいにくれました。夜空の浮き雲の造形のダイナミズムは上へ上へと意識を誘導してくれ、ミーバル百名ビーチの、そのそっぽを向いた波の音も。

これはヤマトンチュー視点でしょうか。漠然としたコンプレックスはやはり僕の個人的な問題でしょうか。僕は外からの目線と、内からの目線両方常に持っていたいです。

丘に囲まれた南部、南風原町津嘉山それが僕の育った集落です。幼い頃、その丘の緩やかな稜線がかつての首長恐竜の死骸が横たわったように想像していました。3頭の横たわった恐竜に囲まれた村は、台風の時の海からの洪水や大陸からの砂嵐から常に守られているんだと思っていました。僕の家が建っていた、津嘉山の7班の小山は、区画整理で消えてしまいました。その恐竜の背中の中にも

道路が引かれ、トンネルまでが開けられるようです。区画整理が始まった頃、久しぶりの帰郷で、原っぱになってしまった家跡地に、幼馴染みの親友が連れて行ってくれた時、僕はどこかを削り取られ、かつての空中の視線も失い、もともとのバランス感や意識、思いすら、足下がぐらついたことを覚えています。



設置中の照屋勇賢

2009, 9 (画廊沖縄にて)

困難に直面した時、自分を支えてくれる力は、自分のやってきた土地の力からやってくると、今になって思い始めます。その風景の中で培った想像力と経験は、未来への自信への手がかりにもなるのではと。紅型の技法も、戦後、米軍の廃材や布切れなどが集められ、焼けた原っぱから、もう一度、植物を蘇らせ、花を咲かせるために、自力でこの土地から復活を遂げた技法です。昔からある風景は、この紅型と同じように、沖縄の自力の源があるはず。津嘉山や神里など、あなたと同じようにその名前がその集落にあるように、その個性とも言える、ありのままの村の姿をもっと大切にすることに、自己判断力そして自信の形成につながるのではないのでしょうか。僕は紅型で染め上げられた英雄達の姿に、津嘉山や百名などの風景や、僕の家族の肖像につながるなにかを生み出せないかと期待しています。同時に英雄達が伝えようとしたヴィジョンをもっと自分に近寄せ、色や形に留めておきたい。

夜中、作業の合間に外に出ると、月明かりに照らされた浮き雲に呼ばれます。「あまり細かい事にこだわらなくてもいいよ」と言ってくれます。村にあるありのままの小山や坂道の姿のように、ありのままの自分に自信をもっていたいです。

(現代美術家／てるや ゆうけん)

「わが幻視する沖縄 ＝照屋勇賢を通して」

加藤 種男

照屋勇賢の作品を見るごとに、私が考えることは病める沖縄ということだ。勇賢の美しい表現に心打たれながら、翻って沖縄を見ると、沖縄さえも他の日本列島の我々と共通に持ってしまう病理が見えてしまう。それは、社会のヴィジョンを打ち出すうえで、最も先駆的で独自性を発揮できるはずの沖縄が、陳腐で貧弱なヴィジョンに迎合する姿である。

識名園を歩くのが好きでよく行く。真ん中の池の周囲を歩いていると「ハブに注意」という看板が目につく。見るたびにいつも不思議な思いにとられる。ハブについて、その猛毒性以外何も知らない者にとって、どのような行動をとることが注意をしていることになるのか、わからない。にもかかわらず得体のしれない危険性だけは、はっきりと伝わってくるので、いつも心に大きな不安を抱えながら恐る恐る通り過ぎる。漠然たる恐怖の中に残る不可解な澱が残る。

我々にはどうする事も出来ない自然の摂理ということがある。しかし、我々が手を加えることで、自然が文字通り生き生きとする場合もある。

マングローブを見て歩くのも無上に好きで、漫湖の周辺の繁茂を見て歩いていて、偶然「漫湖水鳥・湿地センター」という看板を見つけて入ってみた。ヒルギの間から鷺が水の中にくちばしを差し入れては、ひたすら漁をしているのを飽かず眺めていた。この湿地とマングローブの林と、そこで生活するさまざまな生物の全てが沖縄の宝であるはずだ。しかし、センターの裏手に回ってみて、ヒルギの林が大きく伐採されて泥地がそのまま露呈しているのを見た。当時の新聞報道によると、ゴミが堆積し水質が悪化しているので伐採したとある。何という馬鹿げたことを、と思うのは私がよそ者だからだろうか。ゴミは回収すればいい。マングローブとこれを中心とする生態系が水質浄化に果たす役割が大きいことは誰でも知っている。公共事業政策のどこかが間違っている。

これに対して、「島のこしが島おこし」という伊是名島の観光方針は面白い。島のあるべき姿を残し、住んでいる人にとって住みやすい土地であってはじめて、訪れてよい土地だという考えにより、こうした考えに共感しない人は来ないでほしいという、逆説的な提案をしているのがすばらしい。

ここには、自分たち自身の手で自分の住む土地を住みやすいものに形成していこうという「市民自治」が生きている。

いまさら私が言うまでもないことだろうが、沖縄の歴史には、いくつもの理不尽な圧迫が加えられてきた跡があり、それが今に続いている。だからこそ沖縄は今日、沖縄に住む人と沖縄にある資源を生かした独自の社会像を提案する権利をだれよりも持っているはずである。そして、伊是名島の試みに代表されるように、創造的な社会像の提案がいくつもなされている。しかし、沖縄の獨創性を保証しうる資源をしばしば自らの手で破壊してもいるのではないだろうか。



「Notice-Forest 告知一森」より 2008

こういう露骨な社会的政治的な物言いをしないのが照屋勇賢である。勇賢の仕事はいつも穏やかである。チェーン店型のカフェ、ということは大量生産大量消費型の経済の例ということだが、そうしたカフェの紙袋から樹木が立ち上がる作品。あるいは普通の紅型と見える図柄の中に沖縄の歴史を巧みに織り込んだ衣装。どれをとっても、強い政治的なメッセージが表明されたりはしない。穏やかに、けれどもよく見ている内に美しい造形の中から事物の本質が浮かび上がり、我々は何事かを喚起させられる。それが、私には沖縄の人々までが、大規模経済、大規模社会にだけに価値を置き、コンパクト社会、コンパクト経済を忘れ去り、援助経済の上に慣れすぎた結果、コミュニティーを喪失しつつある、その姿を柔らかく穏やかに、しかしヴィジョンとして目に見える形に示しているように思える。そう見るのは私の幻視には違いない。しかし勇賢よ、これからもずっと幻視を見させ続けよ。

(財団法人アサヒビール芸術文化財団

事務局長／かとう たねお)

照屋勇賢展によせて

知念ウシ

この夏の2ヶ月、アメリカ、カリフォルニア州の中東部、ネバダ州との境にある、山に囲まれた砂漠の中の大学に滞在した。

軍事基地も観光開発も自然破壊もない、美しく静かな穏やかな生活に、私の心身の強張りが緩んだ。しかし、そんな中でもずっと気になったのは、アフリカ系二人とアジア系五人の他は白人だけという私たちの空間とは、アメリカの先住民からすると何なのか。つまり、所詮は土地をうばった植民者たちの楽園ではないか、ということだ。

アメリカは「移民の国」といわれる。宗教、政治、封建的抑圧から逃れてきた人々、奴隷として連れてこられた人々、富と力を求めにきた人々、そのような様々な人種の移民、その子孫による国である、と。WASP 優越主義の支配秩序にマイノリティや女性たちが声を上げ、その権利が平等に認められる流れのなかで、初めての黒人大統領も生まれた、と。しかし、それらでさえ、原住民にとってはどのような意味をもつのだろうか。

私はアメリカ・インディアンについてほとんど知らない。ただ、1609年からの薩摩の琉球侵略支配による植民地化と琉球処分後の近代的な植民地化、軍事基地化や近年の「移住ブーム」にさらされる「オキナワ・インディアン」として、自分の沖縄というものに対する感覚、近代の所有権とは異なる土地とのつながり、一体感、「自分（たち）の土地である」「自分（たち）が沖縄の主人公である」という感覚からすると、アメリカ・インディアンにとって、今のアメリカは到底耐えられるものではないのではないのか。アメリカ社会で先住民、マイノリティとしての権利を「認められる」にしても、それはかえって、アメリカへの同化包摂を意味しはしないか。そのような現状で、「ヴィジョンを持つ」というのはどういうことなのか。アメリカ・インディアンはどのような未来を展望し、どのような希望を持ちえるのか。

「オキナワ・インディアン」の政治的位置に置かれるものは、(経済的にも精神的にも)今日明日を生き延びることに精一杯で、ヴィジョンなど持てる状況ではないのではないのか。持つことさえ奪われている、ともいえるかもしれない。もちろん、さまざまな政治団体が「ヴィジョン」を語ることはある。しかしそれは私たちの“本当”のヴィジョンなのか…。

砂漠から沖縄に帰る途中、私はサンフランシスコ・ベイ・エリアに寄った。そこで、友人の黒人系アメラジアンウチナーンチュの池原えりこさんとハワイ3世ウチナーンチュの上運天(うえうんていん)ウエスリーさんと、上記のような話をしていた。

ウエスリーさんがいった、ヴィジョンを持つということは、希望を信じるということだ。それには勇気が必要だ。だから大変なことだ。しかし、どんなに抑圧された人々の中にも、ヴィジョンを持てる人が出てくる。それがヒーロー、ということになるのかな。

そんなユンタクの最中に、沖縄とニューヨークを拠点に制作活動を続ける照屋勇賢さんから、この原稿を依頼するメールが届いたのである。しかも、勇賢さんの新作のテーマが **Heroes**。

勇賢さんは「沖縄の歴史に現れる有名人、歴史の方、沖縄人に限らず、沖縄人と団結、ドキドキさせた英雄達の肖像画を紅型技法を通して表現を試みたい。肖像画のモデルの対象に、尚寧王、尚泰王、瀬長亀次郎、具志堅用高、そして安室奈美恵など」を考えているという。



「Heroes」シリーズより

2009

勇賢さんは彼ら/彼女らがどんなヴィジョンを持っていたと考えているのだろうか。それは私たちのヴィジョンになりえた/なりえるのか。あるいは勇賢さん自身がそれらの人々にどんなヴィジョンを投影しようとしているのか。そこに私たちは自分のどんなヴィジョンを探そうとするのか…。

あるいは、そもそも私たちは、ヴィジョンを見つめる自分の眼差しさえ、持てているだろうか。

外からの眼差しで「沖縄らしさ」が商品化される中、美術市場でも生き延びながら、勇賢さん自身もどのようにオキナワ・インディアンの自分の眼差しを発見し、保ち、育てているのだろうか。

紅型作品「結い You-I」に衝撃を受けた一人として、同世代で同時代を生きる勇賢さんに関心がある。あなたはどのようにこの時代を見、生きていますか、と。

(むぬかちやー/ちにん うしい)

YUKEN TERUYA



2009.7

照屋勇賢について

7月の初め、沖縄の美術界にとって嬉しいニュースが飛び込んできた。NEWS WEEK日本版（7月8日号）にて「世界が尊敬する日本人100人」にニューヨークを拠点に活動を続ける現代美術家、照屋勇賢氏が選ばれた。照屋のオリジナリティーあふれる作品が国際的な現代美術のアートシーンで評価された証と言えよう。照屋が渡米しNYに活動拠点を定めてから10年目の出来事である。沖縄から東京、そして世界へ大きく飛翔する時代が来たことを実感させられた。

照屋勇賢氏は1973年沖縄県南風原町生まれ。多摩美術大学絵画科卒業後、渡米し2001年にはニューヨークのスクール・オブビジュアルアーツMFA大学院ファインアーツ科を修了している。その後の活動はめざましく、アメリカをはじめ、ドイツ、イギリス、日本、フランス、バングラディッシュ、韓国、オーストラリア、ブラジル、など世界各地の美術館の招待展に参加出品し、個展も数多く開催しながら多忙をきわめる制作活動を続けている。照屋の展示歴に目を通すと、2002年以降、年間10回以上の展示会をこなし、そのエネルギッシュな活動ぶりにはお驚きを隠せない。

ここで、照屋の作品との出会いと作品世界について触れておきたい。最初の出会いは、十数年前の照屋の大学時代、那覇市民ギャラリーのグループ展「ちゅら」展に展示した作品「森喰い人（むし）」は、ホークリフトの盤板、やんばるの松食い虫にやられた

倒木、林道で伐採された廃木などを利用した作品だったと記憶している。壁に大量貼り付けられた廃材、床までなだれ込む枯れ木の山。大胆なインスタレーションの作品から、「やんばるの森は泣いている」とメッセージが伝わる印象を受けた。

数年後の2001年、NYに渡って制作された地球の生態系を示した小さな作品「デザート・プロジェクトの為のドローイング」を、津嘉山の実家で見ることがあった。その二作品から共通する、「自然環境破壊」「地球環境保護」のテーマが自ずと立ち上がってくる。照屋はそれを今日の地球環境の重要なテーマと受け止めたことが想像され、後の作品コンセプトの原点をなしていると思われる。内外の現代アートシーンで注目を集めた照屋の代表的な作品、大量消費されるファーストフード店の紙袋を使った「Notice-Forest 告知一森」、トイレトペーパーの芯を使った「Coner Forest」は内在するテーマを、沖縄の原点から立ち上げ、鮮やかに可視化させ、世界の現代美術シーンへ普遍化させた作品といえよう。

さらに、照屋は沖縄の軍事植民地下で起きている社会矛盾に視線を注ぎ、軽快でシニカルに表現した紅型の作品「結い You-I」を生みだし、沖縄大の米軍ヘリ墜落事故を題材に「来るべき世界に」のピザBOXの作品へ結実させている。照屋の社会性が濃厚な制作姿勢は、9.11同時多発テロの現場に遭遇したことから、国家や民族、宗教を超えた平和を求める未来の地球世界像の旗の作品がある。世界各国の旗、民族の旗が一つになった「Color The World」へと繋がっている。また、近年の「Dawn」（夜明け）の作品では、蝶のオオゴマダラの孵化したサナギの殻が付着した「ナイフ」や「ピストル」、「ヒール」などを発表し、暴力からの離脱を静かにそしてエレガントに誘い込み、蝶が飛んで行った先（未来）を暗示させる絶妙な作品である。照屋の作品については魅力的で機知に富んだ作品が数多く制作されており、この紙面で語り尽くせない。

今企画展＝Install-1609＝薩摩の琉球侵略支配400では、照屋は「Cut」を冠テーマにして、伝統の紅型の手法で「Heroes」シリーズを誕生させた。1609年薩摩に幽閉された尚寧王、戦後の米軍統治時代に沖縄の「主体性」を勝ち取るべく闘い続けた政治家、瀬長亀次郎、世界ボクシングチャンピオンになって沖縄人に自信と希望を与えた、具志堅用光、日本のポップ音楽シーンで活躍する安室奈美恵、それぞれの作品から、「沖縄らしさ」、「アイデンティティー」「現場のリアル」が感じられる。足下から伝統と現代、そして未来へ、照屋のシリーズの今後の展開が楽しみだ。

（画廊主/上原誠勇）